公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

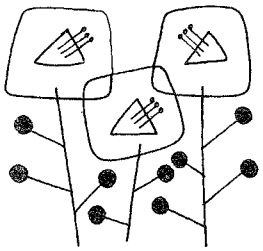
2024年（令和6年）2月5日
第729号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2023年9月30日開催　図書室のつどい 参加者の感想〉

ヒオカ 著

『死にそうだけど生きてます』に学生と参加して



江頭（えとう） 晃子

和光大学で社会教育の授業を担当している。社会教育を学びたいと思う学生の中でも、公民館を利用した経験がある人は年々少なくなってきている。長い学校教育の経験ゆえに「教育」を「教授される」ものと捉えていることが多い。日々の暮らしの中で直面する課題や疑問を多様な人と一緒に考え、議論する中から自分なりの思考と行動を見出していく貴重な機会として国立市公民館の講座に毎年学生と参加させていただいている。

今回参加した「図書室のつどい」は、本のタイトル通り、貧困ゆえに連なってくるさまざまな困難や、限られてしまう選択肢の中で、何度も死にそうになりながら、ヒオカさんがどう生きぬいてきたのか、何を考えどう行動してきたのかが率直に語られた。ほぼ同時代を生きてきた学生にとって、見えていなかった景色や、時に共通する感覚を追体験しながら話を聴き、質問していた。自身の経験を共有化しようと、辛いことも含めて発信する力と、時に傷つけられても多様な人とつながろうとするヒオカさんの力に引きこまれ、力を得ているようにも見えた。

以下、学生の感想を抜粋して紹介したい。

◇「知る」ことが大事

「自分自身の無知は罪だと思った」「いろいろな視点からみないと分からないことがたくさんある」「修学旅行に行かなかった友人がいた。貧困だったのかもしれない」「貧困から遠い環境の人が貧困に置かれた状況を知らないだけでなく、貧困（に近い）当事者も自分の状況を相対化する機会がなく知らないままなこともある」「知らない世界を理解しよう、なぜだろうと疑問に持つことが大事だと思った」

◇共通する不安

「ヒオカさんまで酷くないが、私も貧困によってさまざまな活動が制限されている環境にある。貧困は連鎖するからこそ、断ち切るためにも実家を出たいが、家庭内の全体状況が把握できていない」「人付き合いにお金がかかるという話に共感した。飲み会に行くのも躊躇する」「将来、結婚や子育てをしたいとは思うが、生活費や教育費が上がり、自分以外の人を養える想像ができない」

◇どうにかしたい

「修学旅行費や部活の費用など学校に必要なものは国が出すべき」「貧困やいじめの報道は『可哀想』と同情させる物語にする場合が多いが、もっと制度不備を掘り下げて欲しい」「日本の教育が人権のことを『思いやり化』してしまうというヒオカさんの言葉にはっとした」「ネット上で人権侵害発言をして平気な人を生み出している原因は教育にあると思った」「弱者批判をする人は、その人自身もＳＯＳを出しているのではないだろうか」「誰かに助けられた経験が、次の『助ける』につながるのかも」

◇社会教育施設が無料の意味

「学校が終わると父の暴力がある家庭にも帰れず、図書館が救いと勉強の場となった話に社会教育の重要性を感じた」「地方の田舎出身なので、居場所が図書館しかなかったという話に共感した」「図書館は遊び場、学習の場、集まりの場で、子どもにとって非常に重要」「たとえ少額であろうと『有料かもしれない』施設に子どもは入らない。有料であることが子どもや学生を門前払いしている」

―社会教育機関や地域施設の多くが有料となり、「少額ならしょうがない」という意見が出ることもあったが、「教育を受ける権利」だけではない無料の意味の重要性も再認識した機会となった。

（ＣＣＣメディアハウス）

ブッククラブから

安部公房 著『箱男』～半世紀の時を隔てて～

矢野 勝巳

『箱男』を半世紀ぶりに再読しました。70年代前半の高校時代、安部公房は大江健三郎と並んで文学好きの多くの生徒が読んでいた現代の純文学作家でした。ホットな大江とクールな安部の作品は思春期の心に深く留まったように思います。ただし、安部の小説は、エッセイ集や戯曲集は出版されていたものの、長く発表されていませんでした。

その頃、高校の文化祭において安部公房の講演を聴きました。当時、テレビでも作家が話す機会はほとんどなく、有名作家が目の前でしかも毎日通う学校の講堂で話されていることにたいへん感激しました。

そして卒業時期である１９７３年３月に待望の新作『箱男』が発表され、すぐに購入しました。箱のなかで生活しそこから外を覗くというシュールな物語はその時、高校一年の夏休みに読みふけった同じく安部の『他人の顔』の系譜であるように感じました。

また、この本は、あくまで小遣いですが、自分で購入したはじめての新潮社純文学書き下ろしシリーズです。函入りで本には紙カバーの上にさらにビニールカバーまで掛けられています。また、安部公房自身が記した「書斎にたずねて」と題する投げ込み付録が付いていました。

付録では、満洲で17歳まで育ったために、国定教科書では「自分たちの住んでいるところは山紫水明で、春になれば桜の花が咲いてと習うわけだけれど、現実の周囲は見渡す限り何の突起物もない荒野なんだ」とその違和感が記されています。そこから、「常に現実を相対化して見るという習慣がそうした生活を通して植えつけられた」と述べられています。安部が亡くなって30年経ちますが、ほとんどの小説は今でも文庫として刊行されている稀有な作家です。それほど作品には現代性がありますが、現在の作家には書けない要素があり、その理由の一端は満洲経験にあるのかもしれません。

付録ではまた、人間の歴史は国家を除き組織への帰属をやわらげる方向に進んできたとし、「しかしいま、その最終的な国家への帰属自身が問われ始めている」と書かれています。そして、『箱男』では、それを極限まで追いつめてみたらどうなるかということを試みてみた」と記されています。

この安部の言説に呼応する作品の中の箱男の捉え方が、講師の方と私では正反対だったのが興味深かったです。また、参加者からは安部公房作品を全部読んだというファンの方からもっとも合わない作品のひとつという方までいました。好き嫌いがはっきり分かれる作品でした。さらに若い世代の方からは、高校の課題図書で読んだという話も伺いました。

箱男はオタクやストーカーの要素もあり、その後の都市化の負の側面を先取りしてもいます。また、講師の方の見る見られる関係や征服するされる関係などの説明は、時代を越えた作品の普遍性を示しています。

読んで楽しくないし、励まされないし、よく分からないけれども、奇妙な熱気のある忘れ難い不思議な傑作です。

（文春文庫）

新着図書から

〈総記〉

本の栞にぶら下がる　斎藤真理子（岩波書店）　019

〈歴史〉

孝明天皇毒殺説の真相に迫る　中村彰彦（中央公論新社）　210
戦時下日本の娯楽政策　戸ノ下達也（青弓社）　210
世界史を変えた女性指導者たち　上・下　アンヌ・フュルダ（原書房）　280

〈社会科学〉

カリブ海の旧イギリス領を知るための６０章　川分圭子（明石書店）　302
ぼくたちは見た　古居みずえ（彩流社）　302
マレーシアを知るための５８章　鳥居高（明石書店）　302
ラダックを知るための６０章　煎本孝（明石書店）　302
なんかいやな感じ　武田砂鉄（講談社）　304
堤未果のショック・ドクトリン　堤未果（幻冬舎）　304
２０３５年の中国　宮本雄二（新潮社）　312
不自由な社会で自由に生きる　ウスピ・サコ（光文社）　316
ヘイトクライムとは何か　鵜塚健（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）　316
１３歳から考えるまちづくり　岡田知弘（かもがわ出版）　318
被害者家族と加害者家族死刑をめぐる対話　原田正治（岩波書店）　326
Ｚ世代的価値観　竹田ダニエル（講談社）　361
隠されたトモダチ作戦　エイミ・ツジモト（えにし書房）　369
共生の哲学　朴光駿（明石書店）　369

〈自然科学〉

暗い夜空のパラドックスから宇宙を見る　谷口義明（岩波書店）　443
ようこそ！富士山測候所へ　長谷川敦（旬報社）　451
僕が肉を食べなくなったわけ　ヘンリー・マンス（築地書館）　480

〈産業〉

子どもを壊す食の闇　山田正彦（河出書房新社）　498

〈芸術〉

ラジオと戦争　大森淳郎（ＮＨＫ出版）　699
アートとフェミニズムは誰のもの？　村上由鶴（光文社）　704
マトリョーシカのルーツを探して　熊野谷葉子（岩波書店）　759
但馬日記　平田オリザ（岩波書店）　775

〈言語〉

緊張しても「うまく話せる人」と「話せない人」の習慣　丸山久美子（明日香出版社）　809

〈文学〉

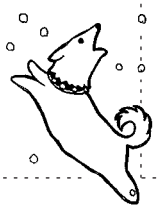
文学は地球を想像する　結城正美（岩波書店）　902
世界文学をケアで読み解く　小川公代（朝日新聞出版）　904
エレジー　赤松利市（光文社）　91あ
饗宴　赤松利市（小学館）　91あ
白蟻女　赤松利市（光文社）　91あ
救い難き人　赤松利市（徳間書店）　91あ
下級国民Ａ　赤松利市（ＣＣＣメディアハウス）　91あ
隅田川心中　赤松利市（双葉社）　91あ
風致の島　赤松利市（講談社）　91あ
照子と瑠衣　井上荒野（祥伝社）　91い
７７７（トリプルセブン）　伊坂幸太郎（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）　91い
シェニール織とか黄肉のメロンとか　江國香織（角川春樹事務所）　91え
フェミニスト紫式部の生活と意見　奥山景布子（集英社）　91お
ハジケテマザレ　金原ひとみ（講談社）　91か
列　中村文則（講談社）　91な

公民館図書室 休室のお知らせ

本の点検・整理のため休室します。

休室期間
3月5日（火）～ 3月7日（木）まで

※新聞は、
朝９時～夕方５時の間、
２階事務室前で
閲覧できます。



〈性教育講座①②〉　詳細は公民館だより１、２月号をご覧ください。

①性を学ぶことはよりよく生きること ― 包括的性教育のススメ

②いのちとからだのおはなし ― 子どもと一緒に学ぶ性教育

講座参考図書

＊こころとからだの不安によりそう　性ってなんだろう？ １～４
北山ひと美監修（新日本出版社）
＊実践包括的性教育― 思春期の子どもたちに「性の学び」を届けたい！
樋上典子・渡辺大輔他（エイデル研究所）
＊乳幼児期の性教育ハンドブック　浅井春夫編著（かもがわ出版）
＊友だちづきあいってなぁに？― 入学前に知っておきたい自分も
まわりも大事にできる「境界」のお話　イヒョンヘ（誠文堂新光社）
＊なぜ学校で性教育ができなくなったのか
包括的性教育推進法の制定をめざすネットワーク編（あけび書房）

図書室のつどい

震災復興体験の壮絶ルポ
『下級国民A』

お話　赤松（あかまつ）利市（りいち）（作家）

―〝上級国民〟があるのなら、その対語は〝下級国民〟だろう。確かに末端土木作業員や除染作業員に従事するしかなかった私は、〝下級国民〟だった―（表題作本文より）

破綻した会社と生活を立て直すために赴いた震災復興現場で赤松さんが経験したのは、想像を絶する「差別」と「貧困」であり、まさに「下級国民」の生活でした。

「住所不定」「無職」の生活を送りながら、作家デビューした赤松さんは、政治やメディアで語られる「美しい日本」、「生涯現役」といった美辞麗句とは異なる現実を、小説を通じて舌鋒鋭く表現し続けています。

異色の作家による渾身のルポルタージュを通して、私たちの周辺にありながらも、見過ごしがちな「差別」や「貧困」について、赤松さんのお話を伺いながら、考える機会とします。

〈赤松さんの本〉 表題作（CCCメディアハウス）、『鯖』、『藻屑蟹』、『犬』、（いずれも徳間書店）『らんちう』、（双葉社）、『ボダ子』（新潮社）、『アウターライズ』（中央公論社）ほか

とき　2月24日（土）朝10時～12時
ところ　公民館　地下ホール
定員　60名（申込先着順）
申込先　2月7日（水）朝9時～
電話またはホームページより申込
公民館　☎042(572)5141

申込フォーム

〈私の本棚から　第5回〉

山本甲士（こうし）著
『ひかりの魔女』

山下　幸代（さちよ）

この本は、6年前に、ちょっと遠出をする時に、駅近くの本屋で表紙を見て、なんとなく読みやすそうに思え手に入れた。思った通り、読みやすく、物語のおもしろさにすっかり作者のファンになってしまった。

ある小都市に住む主人公真崎光一は、現在、在宅浪人中。他に家族は両親と中学生の妹の四人だが、そこへ、訳あって父の母親、つまり祖母が同居することになったところから話が始まる。この、80才過ぎのひかりさんは、元々、この家の主で、若くして夫を亡くし、二人の息子を育てるために近所の子に習字を教えたり、縫いものをしながら生計を立てていた。ひかりさんは高齢なので、光一は母親から外出の時にはお供をするように言いつかる。そして、ひかりさんが昔の教え子を訪ねる先々で、思いもよらなかったことを目にしていく。真崎家の一人一人が問題をかかえ、崩壊寸前だったところから、ひかりさんの動きにより、人と人がつながり、助けを得て、明るい光が見えてくるのがほほえましい。その役割を果たす昔の教え子達は、今は企業の経営者、空手の師匠、魚屋の店主、果てには、やくざの親分まで皆が「ひかり先生は自分の恩人。先生は、自分のことを一番心配してくれた」と言うのもおもしろい。真崎家の四人までも、それぞれ「自分こそ、おばあちゃんから最もたくさんのものをもらった」と言うようになる。これが、題の「魔女」の意味を表わすのだろう。

光一も、「ばあちゃんから特に何をしてもらった訳ではないが、大事なことを教えてもらった」と思うに到る。その中のいくつかに、当たり前のことを丁寧にやれば、それなりの結果がもたらされる。だから、大切なところで手を抜いてはならない。知り合いとの関係を大切に。毎日、しっかりと体を使う。優しいうそのつき方等々。

この物語は、登場人物の一人一人が、自分の目標や希望を持てる場面で終わる。

ひかりさんのような人がそばに居てくれたら、どんなに心強いかと思うが、又、だれでも、ひかりさんの役割りを果たせるのでは、と思う。一言の言葉がけ、ちょっとした手助けによって。

この本は、シリーズ化され三巻まであるが、どれも心温まる良い作品だと思う。特に今のような暗いニュースが、多い時代には。

本を読まなくても、今でもひかりさんが、どこかでとことこ歩いていると思うと、心が温かくなる。（双葉社）